

佐藤一斎著、川上正光全訳注「言志四録(二)―全四巻―」講談社学術文庫、講談社 1979年3月10日刊を読む

## 学は一生の負担

### 〔訳文〕

1. (1) この学(儒学)は、われらが一生背負ってゆかねばならない重荷である。  
 (2) 本当に斃れ死ぬまで努力しなければならない。  
 (3) 道はもとより窮りないものであり、堯や舜の行ったこと以上になすべき善は尽きることがない。
2. (1) 孔子は学に志した 15 歳より 70 歳に至るまで、10 年ごとに進境あるを自覚し、一生懸命に勉強して、年を取るのに気がつかなかった。  
 (2) もし孔子を(73 歳で永眠することなく)80、90 をこえて、百歳までも長生きさせたならば、その神の如き明智光徳は測り難く、想像に余りある所である。
3. およそ孔子を学ぶ者は、この孔子の志をもって自分の志とすべきである。(文政 11 年 9 月 9 日記す。一斎先生時に 57 歳)

### 〔付記〕

- (1) 「孔子を学ぶ者は、宜しく孔子の志をもって志となすべし」ということは孔子のいうことを無条件に心服せよということではない。聖賢の書といえども自己の見識で読まなければならない。(言志録 12 条参照)
- (2) 吉田松陰は「講孟余話」の冒頭に次のように述べている。  
 「経書を読むの第一義は、聖賢に阿らぬこと要なり。若し少しにても阿る所あれば、道明かなく、学ぶとも益なくして害あり。」
- (3) 学に志すものは如何なる書にも溺れないことが肝要である。

P8 ~ 9

### 〔訳文〕

4. (1) 孔子の学問は、まずみずからの修養につとめ、人に接し事に当っては、敬い慎しむ心を忘れないことから、これを広めて天下万民を安んずることに至るまで、専ら実際の事を処する実学である。  
 (2) 「書物を学ぶこと、学んだ事を実行すること、真心を尽すこと、偽りのないこと」、の 4 つの事柄を人々に教えた。  
 (3) そして「常に言うことは、詩経、書経の精神であり、また礼記のとおり礼を執り守ること

と」であって、必ずしも詩を誦し、書を誦読する事のみを専一にするものではなかった。

5. (1)だから、当時の学問をした者は、敏い者、敏くない者はあったが、各々その器を大成させることが出来たのである。  
(2)このように人は皆道を学び得るのであって、人によって能、不能の別があるのではない。
6. (1)ところが後世になると、この孔子の学問は墮落して芸の一途になってしまった。何事もよく知っていたり、一度目を通すとすぐ暗誦するなどというのは芸である。  
(2)詩文の才があって自由自在に千言のものも、立ち所に書き下すなどは優れた芸である。
7. (1)このように学問が(人格を作るといふ根本精神を逸脱して)芸に墮してしまつたので、出来る出来ないの差異が生じた。  
(2)こうなると学問は始めて躬行実践と離れてしまつた。  
(3)世間の人「だれそれは学問は十分あるが、行が欠けているとか、だれそれは行は十分であるが、学問が足りない」とかいうようになる。
8. (1)しかし、一体孔子の学を修めた者で、学問があり余つて、行が欠けている者があろうか。(あるはずはない。)  
(2)世人の言は誤りであるというべきである。

#### 〔付記〕

- (1)現今の日本社会は人物よりも学歴を重視するといわれている。
- (2)したがって、学校教育は、人物をつくるというよりも受験のための教育となり、考える力をつけるよりも、暗記させることに重点がおかれている。
- (3)教育の根源に戻つて考え直さなければならぬと痛感するものである。

P13 ~ 15

#### <コメント>

佐藤一斎著、言志四録(全四巻)の第二巻「誌後録」の冒頭の一節で、57歳の時の文章。孔子を例に挙げながら、学問の本質を説いたもの。参考になる。

— 2016年8月6日(土) 林 明夫記 —